

はじめに

本学の日本語教育センターが設置されてから、丸3年が経とうとしている。「日本語教育センターシンポジウム 2013」は当センター主催のシンポジウムの第2回目に位置づけられる。

第1回目のシンポジウムでは、大学による留学生の受け入れが留学生自身そして日本人学生にとってどのような意義があるのか、また大学の日本語教育の意義と役割とはどのようなものなのかを、学内外の日本語教育専門家、本学の国際戦略の視点から考え、本学の日本語教育に関わる方々と共有することを目的としたが、今回は、そこでの議論を踏まえた上で、外からの視点を取り入れながら日本語教育センターの意義と可能性を考えることを目的とした企画である。テーマを「海外の大学が日本の日本語教育機関に期待すること」とし、海外の日本語教育の第一線で活躍されている日本語教育研究者と議論する機会を設けた。

大学における日本語教育機関は、当然のことながら授業活動に加えて、教材開発、FD活動を展開する。この日々の営みを、関係する各人の成長と教育・研究の発展につなげていくために、日本語教育・日本研究における先進的な実践を、①日本語学習者を核とした活動と、②専門領域を超えた連携のための活動、そして③日々の営みや活動を位置づけ見直す活動、の3つの観点からご講演いただくとともに、議論を行い、当センターの今後の可能性を模索することを目指した。具体的には北米、ヨーロッパ、東アジア、オセアニアの各地域の日本語教育の動向と日本語教育専門家の取り組みについてのご講演と、プログラム評価についてのご講演のあと立教大学日本語教育センターについての発題を行い、最後に全体討議を行った。本報告書は、その内容を収録したものである。

当日は、学内の教職員をはじめ、学生、学外の方々、約70名の参加があった。充実した講演内容とともに、活発に議論が交わされた全体討議の詳細もぜひお読みいただきたい。

最後に、今回のシンポジウムにご登壇くださった日暮嘉子先生、大島弘子先生、徐敏民先生、レベッカ・スーター先生、小澤伊久美先生、池田伸子先生に厚くお礼申し上げます。また、共催をお引き受けくださった小出記念日本語教育研究会と日本総合学会、そして企画・準備段階から本報告書をまとめるまでご尽力くださった日本語教育センターの皆様にご心から感謝の意を表したい。

日本語教育センター長／異文化コミュニケーション学部教授

丸山 千歌